柏艪丸航海日誌
〈vol.16〉
2017年秋号

【発行】注文・問い合わせ先
柏艪舎（はくろしゃ）
札幌市中央区北２条西３丁目１
電話　011-219-1211
FAX　011-219-1210
HP　www.hakurosya.com

無　料

ご自由にお取りください

『完本 丸山健二全集』いよいよ配本開始！

二〇一七年九月、ついに『完本　丸山健二全集』第一回配本『争いの樹の下で』（全四巻）を刊行することができた。丸山健二氏がこれまでの作品をすべて改稿し、十年という歳月をかけて完成する前代未聞の全集のスタートラインに立ったのだ。

今年の五月に丸山先生から突然のお電話をいただいて、四ヶ後に刊行というスケジュールだった。弊社から丸山健二先生の作品を、それも全集を出せるという驚きと喜びをじっくりと噛みしめる間もなく、全集の全体像を固め、東京でデザインの打ち合わせを重ね、編集作業をすすめ、営業に飛び回り、とあっという間に日々が過ぎた。

特に全集の装丁は、「文平銀座」さんが快く引き受けて下さったのが大きかった。宝物のような、ずっと大切にしたくなるような装丁に仕上がり、丸山先生も全集の出来映えに感動され、とても気に入って下さった。写真ではわからないが、ロゴもタイトルもシルバーの箔押しになっている。配本ごとにカバーの色を変える予定。1年、2年と経って、全集が並ぶところを見るのが今からとても楽しみだ。

どうぞ、みなさま末永くお付き合いください。

（編集担当　可知佳恵）

【第一回配本】2017年9月発売

『争いの樹の下で』（全四巻）

「一」6,000円（税別）978-4-434-23633-4
「二」6,500円（税別）978-4-434-23634-1
「三」6,500円（税別）978-4-434-23635-8
「四」6,500円（税別）978-4-434-23636-5

【あらすじ】
私は樹齢千年を誇る巨木だ。
千年にわたって人の世の移り変わり、争いに満ちた人間の営みを目の当たりにして来た私は、目の前で首を吊った妊婦から生まれ落ちたおまえの人生を見守る。
流れゆく者と淀む者、創る者と壊す者、生きる者と生きながら死する者。両者の鮮烈な対比を軸に、この長大な物語は進んでいく。
丸山文学の精髄が詰め込まれた、著者の全集の劈頭を飾るに相応しい傑作。

【第二回配本】2017年12月下旬刊行予定

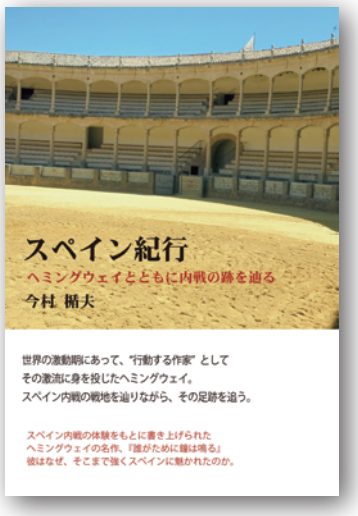
『いつか海の底に』（全二巻）

「一」6,500円（税別）978-4-434-23637-2
「二」6,000円（税別）978-4-434-23638-9

【あらすじ】
北国の漁業だけで食べているような八方塞がりの寒村で母親と暮らす星児。
父親は若い女と出奔。母親は食べることにしか興味がない。
兄は銀行強盗で捕まり、大金の隠し場所を明らかにしないまま、今は対岸の岬の上に建つ刑務所で服役中だ。
銀行強盗の首謀者と思しき男が連れて来た東南アジア系の娘と星児は激しい恋に落ちる。人生の岐路に立った17歳の青年の鬱屈した心情を描き切る。

【第三回配本】2018年3月下旬刊行予定　『野に降る星』（全二巻）　本体価格 各6,000円（税別）
【第四回配本】2018年6月下旬刊行予定　『月に泣く』（全一巻）　本体価格 6,000円（税別）

日本におけるヘミングウェイ研究の第一人者による紀行文



スペイン紀行
ヘミングウェイとともに
内戦の跡を辿る
今村 楯夫
2017年10月刊／1,500円（税別）

スペイン内戦のさなか、報道記者としてスペインに渡ったヘミングウェイの足跡を追うとともに、スペインの歴史と文化を紹介。

本書は、現代アメリカ文学を専門とし、東京女子大学名誉教授である今村楯夫氏によって執筆された。

今村氏は日本国内におけるヘミングウェイ研究の第一人者であり、日本ヘミングウェイ協会顧問を務められている。また、ヘミングウェイに関する書籍はこれまで多数刊行されている。

弊社代表がヘミングウェイ短編集『異郷』を翻訳した際にも、貴重なアドバイスを頂戴した。

二〇一四年には、弊社から『「キリマンジャロの雪」を夢見て』という紀行本を出版させていただいた。

そこでは、タイトルにあるとおり、ヘミングウェイが生涯愛し魅了されたアフリカの大地と自然、そして人々の生き生きとした姿が、写真とともに鮮明に描かれている。

そして、今作『スペイン紀行――ヘミングウェイとともに内戦の跡を辿る』で、著者は、スペイン内戦のさなか報道記者として彼の地に渡ったヘミングウェイの心中に思いを馳せるとともに、スペインの歴史や文化を、写真と文章で巧みに切り取っていく。

現在、バルセロナを州都とするカタルーニャ自治州の独立問題で揺れるスペイン。

スペイン内戦が終結し、フランコ将軍が没してもなお、国内での争いが尽きないのはなぜなのか。ヘミングウェイはなぜ、スペイン内戦後に『誰がために鐘は鳴る』を執筆したのか。

スペインの魅力もさることながら、その奥深い歴史を知ることのできる一冊と言えるだろう。

（編集担当　青山万里子）

チンギス・ハンと義経
モンゴルと日本のあいだに渡された七彩の虹

チンギス・ハン＆源義経
ふたりは広大な大草原に
永劫楽土の建設を目指す。
北海道を代表する詩人、
原子修が美しく豊かな言霊で
綴る、史実に基づいた壮大な
歴史小説。

小説　ユーラシアの虹
―チンギス・ハン＆義経―
原子 修
2017年9月刊／1,600円（税別）

原子修氏のルーツは、青森県の三内丸山遺跡に代表される縄文遺跡が多数見つかっているあたりだという。苗字は、縄文語・アイヌ語に由来する「パラコ」という地名から来ているそうだ。「パラ」は「広い」、「コ」は「谷」を意味する。「私は津軽の縄文人の血を受け継いでいる」という原子氏の作品の底には、いつも「縄文」が流れている。一万年つづいた縄文時代。その間、戦争が起きた形跡は見つかっていないという。

北海道を代表する詩人、原子修氏が今回描いたのは、二人の英雄、源義経とチンギス・ハンの物語だ。源義経がモンゴルに渡ってチンギス・ハンになったのではないかという伝説は日本各地に残っている。現代は「実証」ばやりだ。しかし「ロマン」に裏打ちされない「実証」主義は、人間を矮小化するという弊害があるように思う。

原子氏は、源義経とチンギス・ハンは「魂の双子」だったのではないかというロマン漲る仮説をたて、義経伝説を物語に投影した。二人の英雄のキーワードは「永劫楽土」。『小説　ユーラシアの虹』は、日本とモンゴル、それぞれの国で「永劫楽土」の虹をかけようという夢の実現に向けてひた走る二人を描いた壮大な叙事詩となった。

原子氏の縄文思想が、新たな義経、チンギス・ハン像を生み出したのだ。戦うことで勝ちとる平和。戦う人間にしか平和を語ることができないのだろうか？

自らを現代に生きる「縄文人」だという原子氏がなぜ、戦いに明け暮れた二人に焦点を当てたのか？　モンゴルの大草原と日本の美しい野山を舞台に、情感豊かな美しい言葉で紡ぎだされる幻想歴史ファンタジーを堪能しながら、その疑問を一緒に紐解いてみませんか？　縄文の夢が見られるかもしれません。

（編集担当　可知佳恵）

テレビドラマ化決定！

2018年3月放送予定！！
NHK特集ドラマ
『どこにもない国』

戦後秘話を壮大なスケールでドラマ化！

【出演】
内野聖陽、木村佳乃、原田泰造、蓮佛美沙子、満島真之介、片岡鶴太郎、萩原健一　ほか

満州　奇跡の脱出
170万同胞を救出すべく
立ち上がった３人の男たち
ポール・邦昭・マルヤマ 著
2,300円（税別）
978-4-434-16055-4 C0021